ＫＯＢＥの本棚

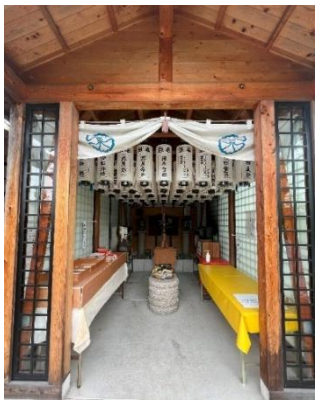
－神戸ふるさと文庫だより－

第 110号　2025年（令和7年）7月20日

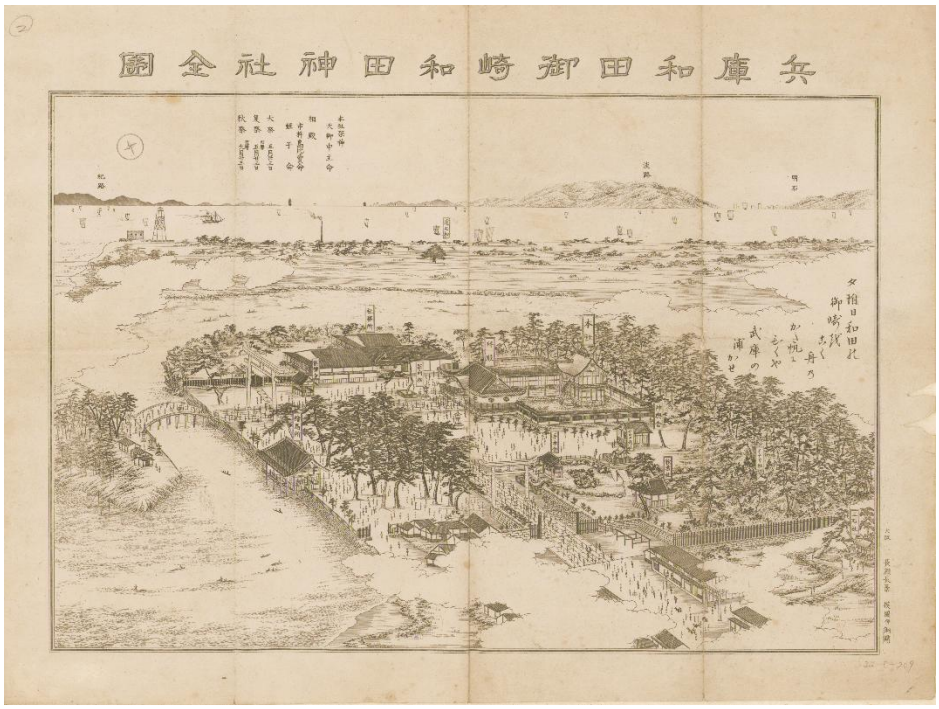
編集・発行　**神戸市立中央図書館**

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL：(078)371-3351　FAX：(078)371-5046



巳塚（上）と祈願巳（陶製の焼き物）（下）



『兵庫和田御崎和田神社全図』

（神戸市立中央図書館貴重資料デジタルアーカイブズより）

遷座前の松林の中にある和田神社の景観が描かれている。

和田神社と白蛇

今年は巳年ですが、兵庫区の和田神社には白蛇を祀る「巳塚」があります。この白蛇に関する伝承が、浜一帯の網元であった安田家に伝わる古文書に残されています。

「網屋古伝記」によると、浜で白蛇を見つけた先祖が、白扇を差し出すと扇子の上でとぐろを巻いたので持ち帰って和田明神として祀ったといいます。また、「延宝八申年*南浜万覚帳有之写」には、白蛇が松の枝にいるのを見つけた神社の人が「明神ならばここにお移りください」とうちわを差し出すと、乗り移ったという逸話が記されています。

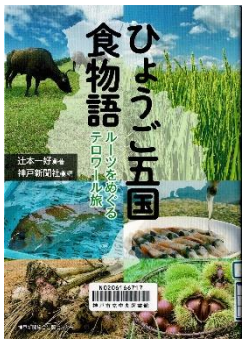
和田神社の社殿は、寛文二年（一六六二）、和田岬の沿岸部に広がっていた「蛭子（ひるこ）の森」と呼ばれる松林に建立されましたが、国策による造船所建設に伴い移転を余儀なくされ、明治三十五年（一九〇二）、現在の地（地下鉄和田岬駅の北）へ移転を完了しました。新たに能舞台が造られ、その落慶記念に奉納舞「道成寺」が上演された際には、舞台の柱に白蛇が現れたと伝えられています。

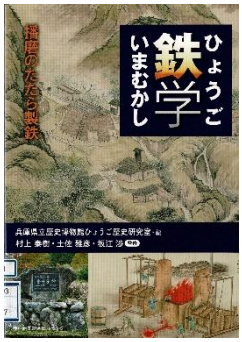
境内の巳塚には参拝者が祈願巳（きがんみ）に願い事を書いて納めています。

参考：『和田神社（和田宮）略記』、『和田神社と和田岬』、『神戸史談　二三五号』ほか　＊延宝八申年は一六八〇年

ひょうご五国　食物語　ルーツをめぐるテロワール旅　辻本一好著　神戸新聞社編（神戸新聞総合出版センター）

「テロワール」はフランス語で、ワインの個性を形作る土壌や気候などの土地の特徴を意味する言葉。本書は「なぜ、その土地にその産物が生まれ、今まで続いてきたのか」という視点で、歴史や環境、生産者の思いや取り組みなど、県内の豊かな恵みにまつわる物語を紹介する。「赤道を越えても腐らない水」として珍重された神戸ウォーターの章では、神戸ウォーターが六甲山の地形と開港に伴う水道事業によって生まれたことを、布引貯水池や神戸港を訪ねてふりかえる。





六甲山５５コース　決定版ガイドブック　加藤芳樹（山と渓谷社）

六甲山を五つのエリアに分け、各ハイキングコースを、初級・中級・上級とグレードを示して紹介している。歩行時間、距離、高低図から、自分に合ったコースを選ぶことができる。行程順に掲載された写真と、コース上の具体的なアドバイスも役立つ。

また、六甲山の歴史、登山道の地名の由来、茶屋、有馬温泉などのコラムも充実しており、読み物としても楽しめる。

ひょうご鉄学いまむかし　播磨のたたら製鉄　兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室編（神戸新聞総合出版センター）

奈良時代に編纂された『播磨国風土記』には、現在の宍粟市や佐用郡において鉄が産出されていたことが記されている。産出される鉄は中世以降、「宍粟鉄」や「千草鉄」と称され、日本刀の原料として珍重された。発掘調査や文献研究、実態が不明だった鉄山の現地調査といった共同研究の成果に基づき、兵庫県の製鉄の歴史を、近世のたたら製鉄を中心に紐解く。

湊川隧道図鑑　佐々木良作（湊川隧道保存友の会）

湊川隧道は、湊川の流路を付替えるため明治期に日本初の河川トンネルとして誕生し、水害被害の軽減や交通の便の向上に寄与した。

新トンネルの完成により二〇〇〇年に役割を終えたこの隧道の価値を来訪者にわかりやすく伝えたいとの思いで、保存友の会副会長である著者が解説書として記した。

内部構造や施工の知恵など、隧道の全てが紹介され、保存の意義を考えるきっかけを与えてくれる。

谷崎禮讃　谷崎潤一郎をめぐる人々との出会い　今谷子（港の人）

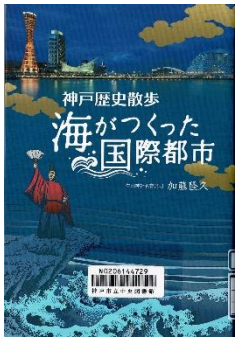
著者が松子夫人や谷崎ゆかりの人々、神戸の旧居を訪ねて取材し、谷崎の人生の痕跡をたどる。当時の近隣住民に聞き取りしたエピソードも豊富で、町内会の会合にはまるで顔を出さなかった、隣家でしばしば電話を借りたが、のんびり優雅でいつも小一時間の長電話だったなど、文豪谷崎の日常がうかがえる。

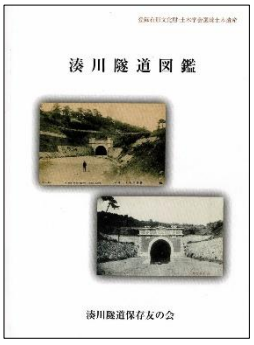
巻末には、著者と松子夫人らとの書状をはじめ、貴重な資料がカラーで掲載されている。

海がつくった国際都市　神戸歴史散歩　加藤隆久（アートヴィレッジ）

神戸史談会会長で、生田神社の名誉宮司である著者は、神戸を「海と山がつくった国際都市」と捉える。平清盛によって整備された大輪田泊や、荒木村重など多くの武将の神戸との関わり、幕末の開港など、古代から現代までの様々なトピックを、それにまつわる場所を実際に訪ね歩いた印象を含めて本書で紹介している。

明治期に長崎から移住してきた中国人が、長崎の諏訪神社と重ねて崇拝した中央区・諏訪神社など、神戸の信仰文化にも光を当て、異国の宗教を受け入れ、共存してきた歩みを多角的に考察する。



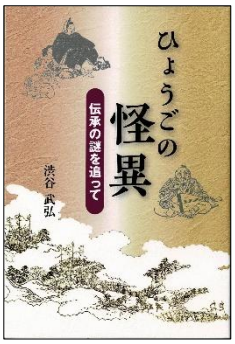


ひょうごの怪異　伝承の謎を追って
渋谷武弘（神戸史学会）

故著者は県内の地名や伝説に深い関心を寄せ、長年に渡って調査を重ねていた。本書は『歴史と神戸』に掲載された論考に未発表稿を加えてまとめたものである。

東灘区と須磨区に存在する綱敷天満宮と菅原道真の御霊信仰の謎、京都で退治された怪物「鵺（ぬえ）」とそれを供養する芦屋市のぬえ塚、夜な夜な井戸に現れ皿を数えるお菊さんの怪談「播州皿屋敷伝説（ばんしゅうさらやしきでんせつ）」など、身近な場所について伝承や歴史が詳細に掘り下げられており、どれも面白い。

怪異や伝承を通して、兵庫の歴史を学ぶことのできる一冊である。



そうしてサンパギータは神戸にいる
奈良雅美（金木犀舎）

サンパギータとは、タガログ語でジャスミンを意味する。著者は、五人のフィリピン人女性をこの凛として香り高い小さな白い花に重ねて、「サンパギータ」と呼び、その語りに耳を傾けた。彼女たちはそれぞれ、日本人夫との不和や母国の家族への仕送り問題、貧困など様々な苦難に直面する。

語り手にとっては、生活のなかで習得せざるを得なかった日本語。その日本語で紡がれるライフヒストリーには、荒波にもまれながらも懸命に生き抜こうとする彼女たちの芯の強さを感じる。

その他の新刊＝

プラネット映画資料図書館５０周年記念誌　田中範子責任編集（プラネット映画保存ネットワーク）

地元人　その地域らしさを、「人」を軸に描く　１　地元人編集舎（兵庫加東）企画・編集（スタブロブックス）

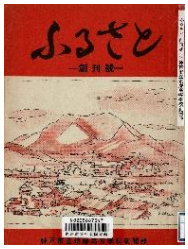
高天　句集　三村純也（朔出版）

神戸　その㉝
あんな人こんな人

横山　光輝　よこやま・みつてる
昭和9年(1934)～平成16年(2004)

漫画家の横山光輝（本名・光照）は、昭和9年に現在の須磨区に生まれました。山で虫取りや冒険ごっこに興じる小学生時代を過ごしますが、昭和19年9月頃、空襲の激化により鳥取県に疎開しました。疎開から戻った横山は、空襲により瓦礫の山となった神戸を目にして戦争の破壊力に愕然（がくぜん）とします。この経験は後に、アメリカの爆撃機「B29」に着想を得たロボット「鉄人28号」の誕生につながりました。戦後の苦しい生活のなか「救いだったのは神戸が海と山に近いことであった」*といい、白川の山（須磨区）や駒ヶ林の海（長田区）で遊ぶ青春時代を過ごしました。

中学校では美術部に所属し、部活動の時間だけでなく授業中もノートの隅に漫画を描いていたといいます。



高校は神戸市立須磨高等学校へ進学し、少年漫画雑誌に投稿をはじめました。在学中の昭和26年に同校新聞部が発行した『ふるさと』創刊号には、高校生の横山が描いた４コマ漫画が掲載されています。卒業後は神戸銀行に入社したものの数か月で退社、映画会社で宣伝チラシを作成しながら漫画家を目指します。昭和30年に『音無しの剣』で本格デビューを果たして翌年上京し、やがて『鉄人28号』や『三国志』が人気を博し漫画業界を牽引する存在となります。

没後の平成21年、その偉功をたたえて神戸で「ＮＰＯ法人ＫＯＢＥ鉄人プロジェクト」が設立され、長田区の若松公園に身長18m、重さ50ｔの鉄人28号のモニュメントがつくられました。鉄人は震災復興のシンボルとして、市民を見守っています。

【参考】『横山光輝「鉄人28号」の青春』山田幹雄（神戸市立須磨高等学校同窓会本書刊行委員会，2010）、「まんが浪人」（『横山光輝超絶レアコレクション』（潮出版社，2015）所収）ほか
*横山光輝「想い出の海と山」（『ニューひょうご』平成元年5月号）より引用

ランダム・ウォーク・イン・コウベ ⑪⓪

神戸布引ハーブ園と治山の取組み

布引ハーブ園は、新神戸駅の北側に位置する世継山（よつぎやま）を頂上とする丘陵地帯にあります。新神戸駅西側すぐの乗り場から神戸布引ロープウェイに乗り約一〇分の空中散歩を楽しむと、そこはもうハーブ園です。

今ではハーブ園が開園する以前の様子を覚えている方も少なくなったのではないでしょうか。

六甲山は長年の乱伐の結果、明治に入る頃には禿げ山となっていました。世継山の山頂付近も同様に荒廃していたようです。植物学者の牧野富太郎は明治十四年（一八八一）に故郷の四国から上京する際に、「私は瀬戸内海の海上から六甲山の禿山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った。」（「東京への初旅*」）と記しました。英国出身の実業家A・H・グルームは兵庫県の服部一三知事に自ら植林した所を見せながら砂防や植林の必要性を説いたといいます。神戸市の依頼を受け生田川流域を視察した東京帝国大学農科大学（現東京大学）の本田静六（せいろく）は、早急に砂防工事と植林を行うべきと提言しました。明治三十五年（一九〇二）、計画的な砂防植林が始まり、この後、生田川上流や再度山などにマツやヒノキ、スギなど多様な樹木が植栽されました。昭和十三年（一九三八）に発生した阪神大水害では、懸念されていた六甲山地の荒廃による土砂災害が現実のものとなり、治山の重要性をまざまざと痛感させられる事態となりました。

地形図「神戸首部」昭和42年
国土地理院　より抜粋
神戸ゴルフ場の位置が確認できる

太平洋戦争後、ゴルフが新たな大衆のレジャーとして親しまれるようになる中、昭和三十五年（一九六〇）六月、現在のハーブ園の場所に神戸カントリー倶楽部というゴルフ場がオープンしました。ところが、昭和四十二年（一九六七）七月、西日本を集中豪雨が襲った際、世継山斜面から約五二〇〇㎥の土砂が崩壊しました。ふもとの市ヶ原集落では駐在所や茶屋、民家が押しつぶされ、二一名の人命が失われました。昭和四十七年（一九七二）、この用地を神戸市都市整備公社が買い受け、無理なゴルフ場開発を反省し、跡地をどのように利用するか検討が始まります。地質調査の結果、都市公園ならば複雑な地形を利用した計画が立案できるとの結論に至りました。昭和五十九年（一九八四）発行『布引ゴルフ場跡地の公園整備方針について』の神戸市公園緑地審議会答申書には、基本方針の第一に「防災対策の万全を期す　地形、地質及び過去の災害状況等を調査し、防災対策を十分行う必要がある」という項目が挙げられています。

その後、昭和六十年（一九八五）に宮崎辰雄市長からロープウェイ構想が発表されたこと、また神戸市政一〇〇周年記念事業の一環として神戸の新たな名所を誕生させるという課題が加えられことにより、「ハーブ園構想」が持ち上がりました。ハーブを公園全体のテーマとした都市公園は日本で初めてのことで全国規模の話題になると期待できること、神戸の街のイメージにマッチすることなどが主な理由でした。

平成三年（一九九一）十月に開園し、当初の予想を大きく上回る一二万人もの入園者（開園より一年間）が詰めかけました。現在は、神戸市民の憩いの場であり、外国からの観光客も訪れる神戸を代表する観光地となっています。

さらに、令和六年（二〇二四）、神戸市は、市街地から山上へのアクセス向上を目的として、ハーブ園山頂駅と摩耶山上の掬星台を結ぶ新たなロープウェイ整備のための調査に動き始めました。

現在のハーブ園の様子
（「風の丘中間駅」を北側から望む）

前出の本田静六は、阪神大水害後に市が主催した講演会で「神戸脊山一帯は市の森林公園として當然利用せらるる可きものであるが、只其地勢地質等の關係上國土の安定と治水關係を第一義に置き、其第一義を犯さゞる範圍内と方法とに於て文化的利用を實行す可きものであります。」と話しています。繰り返されてきた災害の教訓を忘れず、先人が育てた緑豊かな山を大切に守り、背山との暮らしを楽しんでいきたいものです。

参考文献
『新修神戸市史　生活文化編』
『六甲山の100年そしてこれからの100年』『布引ハーブ園の発展を願って』ほか
*『牧野富太郎選集1』所収

世界をひろげる、ほんとの出会い。
神戸「本」のまち推進プロジェクト
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。